

花は盛りりに『徒然草』／兼好法師が詞のあげつらひ『玉勝間』

◇次の【文章Ⅰ】は『徒然草』の一節である。【文章Ⅱ】は『玉勝間』の一節である。これらを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。

【文章Ⅰ】

花は盛りりに、月は限なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を恋ひ、たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、「障ることありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。男女の情けも、ひとへにあひ見るをばいふものかは。あはでやみにし憂さを思ひ、¹あだなる契りをかこち、長き夜を独り明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとはいはぬ。

望月の限なきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる群雲隠れのほど、またなくあはれなり。椎柴、白樫などの濡れたるやうなる葉の上いきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。

すべて、月、花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いと頼もしう、をかしけれ。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。

片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねち寄り立ち寄り、⁵あからめせずまもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下り立ちて跡付けなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

【第二百二十七段】

【文章Ⅱ】

兼好法師が徒然草に、「花は盛りりに、月は限なきをのみ見るものかは。」とか言へるは、いかにぞや。いにしへの歌どもに、花は盛りなる、月は限なきを見たるよりも、花のもとには風をかこち、月の夜は雲を厭ひ、あるは、待ち惜しむ心づくしを詠めるぞ多くて、心深きも、殊にさる歌に多かるは、みな、花は盛りをのどかに見まほしく、月は限なからんことを思ふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを嘆きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風を待ち、月に雲を願ひたるはあらん。さるを、かの法師が言へることくなるは、人の心に逆ひたる、後の世のさかしら心の作り雅びにして、まことの雅び心にはあらず。かの法師が言へる言ども、この類ひ多し。みな、同じことなり。すべて、なべての人の願ふ心に違へるを雅びとするは、作りことぞ多かりける。恋に、あへるを喜ぶ歌は心深からで、あはぬを嘆く歌のみ多くして心深きも、あひ見んことを願ふからなり。人の心は、うれしきことはさしも深くはおぼえぬものにて、ただ、心かなはぬことぞ深く身にしみてはおぼゆるわざなれば、すべて、うれしきを詠める歌には、心深きは少なくて、心かなはぬ筋を悲しみ憂へたるに、あはれなるは多きぞかし。しかりとて、わびしく悲しきを雅びたりとて願はんは、人のまことの情ならめや。

【文章Ⅰ語注】

- 1 あだなる契り はかなく、実を結ばなかつた約束。
- 2 千里の外 はるか遠い所。
「三五夜中、新月色、
二千里外故人心」
『和漢朗詠集』十五夜 白居易
- 3 椎柴 椎の木のこと。
- 4 白樫 樫の一種。
- 5 あからめ わき見。

【文章Ⅱ語注】

- 1 作り雅び ことさらに作りあげた風情。

問1 【文章Ⅰ】の傍線部a～cの解釈として最も適当なものを、次の各群のA～オのうちから、それぞれ一つずつ選べ。

a 咲きぬべきほどの梢

- ア 咲くかどうかもう分らない頃の桜の梢
 - イ 半分ほど咲いている頃の桜の梢
 - ウ もう咲ききってしまった頃の桜の梢
 - エ 今にも咲きそうな頃の桜の梢
 - オ まだ咲いてはいない頃の桜の梢
- ア はるかかな空を見上げて物思いに沈み
 - イ はるかかなたにいる恋人を思いやったり
 - ウ はるか遠い宮中にいる帝に思いを馳せ
 - エ はるかかなたを漂う雲を眺めたり
 - オ はるか先にある死について考えたり
- ア 冷たい心しかない友はほしくない
 - イ 立派な心を持つ友もいたものだよ
 - ウ 情趣の分かるような友があればなあ
 - エ 理解力にたけた友がかつてはいたのに
 - オ 優しい心が友にはあつてほしいものだ

問2 傍線部①「よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のA～オのうちから一つ選べ。

c 心あらん友もがな

- ア それ以外の物事でも、その始まりや終わりには失敗や問題が生じがちだということ。
- イ それ以外の物事でも、その始まりや終わりにばかり人は注目しがちであるということ。
- ウ 何事にしても、繰り返し経験することによって真実が理解できるのだということ。
- エ 何事にしても、その始まりや終わりにはその時なりの趣が感じられるものだということ。
- オ 何事にしても、その始まりや終わりを経験せずに済ますことはできないということ。

問3 傍線部②「すべて、月、花をば、さのみ目にて見るものかは」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のA～オのうちから一つ選べ。

- ア 月や花といったものは、見ただけで満足し、和歌を詠むことをしないのでは不十分なのだということ。
- イ 月や花といったものは、その場で実際に目にしなければ、本当の美しさを知ることはできないのだということ。
- ウ 月や花といったものは、実際に目で見るよりも、心の中で思い描くほうが味わい深いものだということ。
- エ 月や花といったものは、刻々と変化するもので、人の目ですべてを捉えるということは不可能なのだということ。
- オ 月や花といったものは、目で見るだけでなく、五感を使ってその美しさを味わう心構えが必要なのだということ。

問4 傍線部③「よき人」、傍線部④「片田舎の人」の違いについて、筆者はどう考えているか。その説明として最も適当なものを、次のA～オのうちから一つ選べ。

- ア 人生というものの受け止め方において、「よき人」は鷹揚だが、「片田舎の人」は意地汚く幸福を追求するという考え。
- イ 人への接し方において、「よき人」は十分な距離感を持つて接するが、「片田舎の人」はずけずけと踏み込むという考え。
- ウ 物事の情趣を感じる態度において、「よき人」はいい加減だが、「片田舎の人」は些細なことでも真剣に向き合うという考え。
- エ 物事を理解する態度において、「よき人」は広く浅く理解するが、「片田舎の人」は狭く深く理解するという考え。
- オ 物事をおもしろがる態度において、「よき人」はあつさりしているが、「片田舎の人」はしつこくもてはやすという考え。

問5 三人の人物が【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】について討論した。次は、その【三人の人物による討論の一部】である。これを読んで、後の問い(i・ii)に答えよ。

【三人の人物による討論の一部】

- Aさん 【文章Ⅰ】について批判しているのが【文章Ⅱ】なんだね。
- Bさん そうだね。【文章Ⅱ】は、「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」について、異議を申し立てているね。
- Cさん 【文章Ⅱ】は、Aと考えているわけだね。

Aさん 兼好法師の発言を、「人の心に逆ひたる、後の世のさかしら心の作り雅び」「まことの雅び心にはあらず」とまで言っているよ。
Bさん そうそう。でも、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は時代的な隔たりが大きいよね。その時代でよいと思うものも変わっていったのではないかな。

Cさん そうかもしれないね。【文章Ⅰ】から【文章Ⅱ】の間には、Bなどの文学作品が見られるから、読んでみようよ。

- i 【三人の人物による討論の一部】の空欄Aに入る語句として最も適当なものを、次のA～オのうちから一つ選べ。
 - ア 兼好法師の和歌の内容に対して、その意見には矛盾があり、説得力がないし信頼に足るものではない
 - イ 兼好法師の和歌の批判まで行って、兼好法師の考え方は浅薄で、文学的才能も認めることができない
 - ウ 昔の和歌に詠まれている内容と兼好法師の意見を一緒に批判して、その意見には根拠となるものがない
 - エ 昔の和歌に詠まれている内容について、人は皆本心では盛りの花や欠けることのない満月を見たがるものだ
 - オ 昔の和歌に詠まれている内容を根拠にして、何をすばらしいと感じるかはその人ごとに異なっている
- ii 【三人の人物による討論の一部】の空欄Bに入る語句として適当でないものを、次のA～オのうちから一つ選べ。
 - ア 折たく柴の記
 - イ 無名抄
 - ウ 太平記
 - エ 世間胸算用
 - オ 駿台雑話

問3	問1	花は盛りに『徒然草』兼好法師 が詞のあげつらひ『玉勝間』
	a	
問4	b	
	c	
問5		
i		
ii	問2	
		年組番
		氏名
		評点

解答解説

花は盛りりに『徒然草』／兼好法師が詞のあげつらひ『玉勝間』

〈50点〉

問1 aⅡエ bⅡイ cⅡウ (各5点―15点)

解説

- a 「咲き」は力行四段活用動詞「咲く」の連用形。「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形で、ここでは強意を表し、「べき」は推量の助動詞「べし」の連体形で、「ぬべし」で「…してしまいたいそうだ」などという意味になる。
- b 「雲居」は、①「空」、②「雲」、③「はるかに離れた所」、④「宮中」などの意味がある。ここでは、前の部分に「男女の情けも…」とあり、恋愛について述べている箇所であって、③の意味。
- c 「心あら」はラ行変格活用動詞「心あり」の未然形で、「心」は「趣」を意味している。「ん」は推量の助動詞「ん(む)」の連体形で、ここでは婉曲の意味を表す。したがって、「心あらん友」とは、「情趣の分かるような友」ということになる。「もがな」は終助詞で、願望を表す。

問2 エ (7点)

解説

本文冒頭にある、「花は盛りりに、月は限なきをのみ見るものは」(Ⅱ桜の花は盛りりに咲きそろっている状態だけを、月は一点の曇りなく輝いている状態だけを見るものであろうか、いや、そうとは限らない)という話題に引き続き、「花」や「月」だけではなく、「よろづのことも」(Ⅱ一般に何事でも)同じである、という文脈である。傍線部の直後では、「男女の情け」を例に挙げて説明している。よって、エが正解。

ア・イは「よろづのこと」を「それ以外の物事」としているので間違い。ウ・オは「始め終はりこそをかしけれ」を正しく解釈していないので間違い。

問3 ウ (7点)

解説

傍線部の「ものかは」は終助詞で、反語の意味を表すので、「総じて、月や、花を、そうむやみに目でばかり見るものだろうか、いや、そうではあるまい」と訳す。そして、そのように考える理由を、直後で、「春は家を立ち去らで…閨のうちながらも思へること、いと頼もしう、をかしけれ」と述べている。これはつまり、実際はそのものを見るよりも、心の中で思い描くほうが味わい深いものがあるということと言っているので、ウが正解。

アは「和歌を詠むことをしていないのでは不十分」、イは「その場で…美しさを知ることではない」、エは「人の目ですべてを捉えるということとは不可能」、オは「五感を使ってその美しさを味わう心構えが必要」が間違い。

問4 オ (8点)

解説

「よき人」とは、「身分が高く教養のある人」のこと。「興ずるさまもなほざりなり」とあり、形容動詞「なほざりなり」は、①「いい加減だ」、②「あつさりしている」などの意味があるが、ここでは②の意味。対する「片田舎の人」については、「色濃くよろづはもて興ずれ」とあり、これは「しつこく何事をおもしろがってもてはやす」ということである。その後は、「片田舎の人」の振る舞いについて批判的に述べている内容になっていることから、筆者は「よき人」のほうの態度こそ称賛しているということが分かる。よって、オが正解。

ア・イ・エは、「よき人」と「片田舎の人」の比較内容が間違い。ウは、それぞれについての評価が本文の叙述とは異なっているので間違い。

問5 iⅡエ (7点)

解説

空欄Aには、【文章Ⅰ】に対する【文章Ⅱ】の考えが入る。【文章Ⅱ】では、【文章Ⅰ】の「花は盛りりに、月は限なきをのみ見るものは」、つまり、花や月は盛りをのみ見るものとは限らない、という考えに対し、「いかにぞや」(Ⅱどうであろうか)と疑問を呈し、「いにしへの歌ども」に書かれた内容を引用している。それらの和歌には、「花のもとには風をかこち、月の夜は雲を厭ひ…多く」、つまり、「みな、花は盛りをのどかに見まほしく、月は限なからんことを思ふ心のせちなる」とある。昔の和歌には、花を散らす風や月を隠す雲をいやがる歌が多く、皆、花は盛りを月は曇りがたいのを見たいのだ、と言っているのである。よって、エが正解。

ア・イは、「兼好法師の和歌」が間違い。ウは「昔の和歌に詠まれている内容と兼好法師の意見を一緒に批判して」、オは「何をすばらしいと感じるかはその人ごとに異なっている」が間違い。

iiⅡイ (6点)

解説

空欄Bには、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の間に書かれた作品として適当ではないものが入る。【文章Ⅰ】の『徒然草』は鎌倉時代末期(十四世紀前半)に成立、【文章Ⅱ】の『玉勝間』は寛政五年(一七九三)正月から書き始め、没年(一八〇一)に至るまで書かれたもの。ア『折たく柴の記』は、新井白石による自伝。享保元年(一七一一)に起筆し、享保一〇年(一七二五)に作者が没するまでの間に成立。イ『無名抄』は、鎌倉時代の一二二一〜一二二六年頃に成立した、鴨長明による歌論書。よって、これが正解。ウ『太平記』は、南北朝時代の軍記物語。エ『世間胸算用』は、元禄五年(一六九二)に成立した、井原西鶴による浮世草子。オ『駿台雑話』は、享保十七年(一七三二)に成立した、室鳩巢の随筆。